

清沢満之手沢本『テイーチング、オブ、エピクテタス』の 書入れに関する一考察

——安藤州一の言葉を導きとして——

川 口 淳

はじめに

清沢満之（一八六三～一九〇三）とエピクテタス（エピクテトス…五〇頃～一三五頃）⁽¹⁾の関係論じる研究は、清沢が『臘扇記』という日記をとった時期を中心に、近年いくつか報告されている。⁽²⁾しかしながら、清沢が亡くなる約一年前（一九〇二年五月一日）に、彼が入手した手沢の書、*The Teaching of Epictetus*（以下、『テイーチング』）と清沢との関係を主題的に論じた研究はないだろう。『臘扇記』というエピクテタスの抜き書きのある日記が現存しており、『臘扇記』を書き綴った思想深化の時期を研究対象とすることは、清沢思想を考察するにあ

たり重要な課題であることに異論を挟む余地はない。一方で『テイーチング』はそれを直接的に抜き書きし考察した日記等が存在しないことから、『臘扇記』研究に比べると重要度が低いと判断することもできよう。

しかし、違う観点から述べると『臘扇記』に記されたエピクテタスの書である、*Discourses of Epictetus*（以下、『ディスコース』）が今どこにあるのかは現在の研究状況では明らかに不十分な一方、『テイーチング』については手沢本の現存が確認でき、それゆえに如何にテキストを読んだのかを、その書の書入れなどによって考察するという研究方法の可能性が生れうるし、精神主義という清沢晩年の思想営為との関係性を問う素材としても

注目に値するといふことができる。

『ティーチング』は、清沢と親交のあった仏教青年たちによって、清沢の死後も、清沢手沢の書として親しまれ、友人稲葉昌丸の手によって、『エピクテタスの教訓』と題する日本初の翻訳出版がなされていくのであり、日本では『ティーチング』が先に紹介されていたのである。

ところで詳しくは本論で論じるが、そもそも清沢が生涯どのようなエピクテタスの書に触れたのか。そのことは明瞭ではない面がある。まず明治二五年の書簡によれば、清沢はドイツ語訳のハンドブックを購入するように友人に依頼しているが、実際に手にしたかはわからない。次に、清沢は明治三一年五月『臘扇記』の時期に『デイスコース』を沢柳政太郎から借り受ける。明治三五年五月、清沢自ら書店で『ティーチング』を購入。明治三五年頃『デイスコース』を沢柳に返却。その後、沢柳からエピクテタスの書（おそらく『デイスコース』）をもらい受けた。これらの書の中で『ティーチング』のみが、現存していることがわかつている。清沢手沢の書である『ティーチング』が現存することに関しては、安富信哉や西本祐攝の研究においてすでに指摘されている。⁽⁵⁾ 本論では

さらに踏み込んで、書誌的な基礎考察として、大谷大学図書館に一九七七年に寄贈され所蔵されている、『ティーチング』の書入れが清沢によるものであることを、浩々洞で清沢に師事した安藤州一の証言から考証しつつ、その考察を通じて、晩年の清沢がどのようにエピクテタスの書に親み、そこから如何なる思索が為されたのかについて安藤の言葉を導きとして愚考を試みるのが、本論文の目的である。具体的には、「死の問題」「パンの問題」として出てくる人生上の問題と「Door is open」というエピクテタスの言葉を考察する。また「奴隷について」という章にある清沢のアンダーラインに注目した考察を行っていきたい。

三つあるいは四つのエピクテタスの書

清沢はエピクテタスの書について、いつの時期に、どのようなテキストを読んだのか。それらの書は今どこにあるのか。『デイスコース』と『ティーチング』を晩年にあわせて読んでいたとされている。⁽⁶⁾ ただいくつかの清沢の友人や関係者の証言が混み入っている。詳細に検討された研究はないので、今一度整理し、思想研究の前提として考察する。

西本の研究によれば、エピクテタス関連の書物については、シュヴェーグラーなどの西洋哲学史研究の資料にあらわれるストア哲学の解説を除いて、三点手にしている可能性があるとする⁽⁷⁾。

①は明治二五年一月二六日の書簡の記述から、レクラム出版の世界文庫 (Universal Bibliothek) の二〇〇一番 *Epiktets Handbuehlein der Moral* と推定できる⁽⁸⁾。ドイツ語訳のエンケイリディオ (アリアヌスが要約した短マニユアルやハンドブックといわれるもの) である。清沢は書簡で、この書と思われるタイトルを略記し、これが書店にあれば、購入するように人見忠次郎に依頼している⁽⁹⁾。実際に清沢がこの書を引用した箇所は見当たらず、読んだのかは明らかになっていない。同書は道德についてのハンドブック (要訓) であり、ギリシャ語からドイツ語に翻訳されたテキストで、語録部分は訳されていないため、小冊子である。

②は『臘扇記』に引用される *Discourses of Epictetus* (『ディスコース』) である。これについては、『臘扇記』の引用の頁数と比定される版として、ジョージ・ロングで、ロンドンの George Bell and Sons より発行されたものが指摘されているが、出版年次がそれぞれの研究

者によって異なる (一八七七・一八八八・一八九〇年)。この異なりは、実際の原本が確認されていないからである。この書は①や③と違い語録 (*Discourses*) の八巻中現存する四巻と、加えて要録と断片からなる大部なものである。この書と清沢の関係を論じる研究は、すでにいくつか出されている。

③は本研究で取り扱う、明治三五年に入手した *The Teaching of Epictetus* (『ティーチング』) である。この書について、安富や西本は、「清沢満之所蔵」と書かれた本書が大谷大学図書館に所蔵されていることを指摘する。満之自身の論稿「エピクテタス氏」の「然るに本年 (明治三五年) 五月に至り、更に同一人の手を経て、「エピクテタスの教旨」と云ふ一本を得まして」という記述と、大谷大学所蔵本の書入れ箇所の時期が符合していることが根拠である⁽¹⁰⁾。

大谷大学所蔵本の見開きの書入れ情報は、「明治卅五年五月十一日本郷区本郷大和屋ヨリ購入 / 清沢満之所蔵」であり、この書入れにより、明治三五年五月一日に清沢が購入したことがわかる。

もう一頁めくると、

哭清沢学師

病入膏肓已十年 欽師護法志最

堅 精神界裏性靈在 談読遺文

金玉篇

為法提携二十年 金蘭情緒永聯錦

西京分手百余日 生別死離歎業天

南條碩果

と、清沢の友人としても知られる南條文雄が清沢の死を悼み、回想した漢詩が書入れている。

次に、『ティーチング』の構成は、ローレストンの手によってエンケイリディオンの（要録）の言説を瓦解し、それらを全五巻に分け、それぞれの巻に配当し、各章に「語録」（ディスコース）や「断片」（フラグメント）から肉付けをして英訳した書物である。全五巻の主題区分は、一卷「ストア哲学の第一原理について扱うこと」、二巻「これらの原理の生活への一般的応用を扱うこと」、三巻「同胞との人間関係について」、四巻「神との関係について」、五巻は「数個の結章を除いては、大部分が、さまざまな場面における行動にかんする実践的な助言や、その能力を使用することについての付随的意見が含まれ

ているもの」である⁽¹²⁾。ローレストンは自ら『ティーチング』を記した意図として、

『エンケイリディオン』は要約である。そしてそれはその種の他の作品よりも特段と人の感情を駆り立てる力強さをもっているが、エピクテタスが実際に教えを説くなかで示した、興味深い暗示、思慮、ユーモア、雄弁の連発、突発で鋭い語り方、個人的感情の鮮やかな告白の数々を、我々に伝えることができなものである。それゆえに、そのようなことに価値を見、関心をもつ者がエピクテタスにできる限り近づけるように、『エンケイリディオン』と『論集（語録）』から、両方の利点を有する第三の作品を作り出す必要があつたと見受けられる⁽¹³⁾。

と述べるように、それは原文に正確な訳書ではなく、かなり手の込んだ編集を加えたギリシャ語からの英訳書であり、第三の作品である。この『ティーチング』について、『人生談義』の訳者である鹿野治助は、「相当主観的に構成した抄訳」と述べるように、日本におけるエピクテタス研究としては、史料の価値の低いテクストとし

て扱われているといえよう。一方、清沢周辺としての『ティーチング』は、清沢の友人である稲葉が日本で最初に翻訳し重視されてる。

清沢の読んだエピクテタスの書の

消息についての難点

①のドイツ語訳は手にしたかわからない。本章では清沢、住田智見、吉田賢龍の証言をもとに、清沢が②『デイスコース』や③『ティーチング』をどのように読んだのかを考察する。

・清沢満之の言葉

去る三十一年の秋に、東京へ参り、沢柳政太郎氏を尋ねました節、フト其書架中に「エピクテタス講話」と題する一書を発見しまして、直に借り受けて参りまして、爾来幾回も之を通読し、其の意義に就いて知人にも話し抔して楽しんで居ることであります。然るに本年五月に至り、更に一同人の手を経て、「エピクテタスの教旨」と云ふ一本を得まして、之をも反復読誦して居ります⁽¹⁵⁾

・住田智見の言葉

予の三部経は『阿含経』と『歎異鈔』と『エピクテタスの語録』である。……『エピクテタス』は、先年来、沢柳氏に借りてゐたが、氏が洋行せらるゝに就いて持つて行かれた。所が此頃独逸で購得して贈つて下されたのがこれである⁽¹⁶⁾。

※参照：沢柳の洋行について

明治三五年七月十二日、第十三回万国東洋学会会議に

出発（ハンブルグ）

翌年三月二十八日、帰国⁽¹⁷⁾

・吉田賢龍の言葉

清沢先生がエピクテタスを非常に愛読せられて、所持して居られる其の書物に、西洋第一の書と開巻第一に筆太々と書き付けられ、人にも之を読むことを頻りに推奨せられた訳は何に因由して居るであらうか⁽¹⁸⁾。

三氏の言葉や『臘扇記』の記述、大谷大学図書館所蔵の『ティーチング』などを参照し、弟子らの証言がすべ

て正しいとすると、清沢は以下のようにエピックテタスの書にふれたとまとめられる。

- ・明治三一年九月、友人であつた沢柳政太郎より、『デイスコース』を借り受けた。
- ・明治三二年九月、関根仁応の手から清沢所沢のエピックテタス(『デイスコース』か)を一時的に暁鳥敏へ渡した。(『関根仁応日記』)
- ・明治三五年五月、同じく沢柳の案内によつて、『ティーチング』を東京の本屋にて購入した。
- ・明治三五年七月、沢柳がドイツへいくより前に、『デイスコース』は沢柳に返却した。
- ・その後沢柳はドイツの書店でエピックテタスのなんらかの書を見つけたので、それを購入し清沢へ贈った。
- ・『西洋第一の書』と書き付けられたエピックテタスの書が存在したはずであるが、大谷大学所蔵の『ティーチング』にはない。また破り取られた形跡もない。よつてもう一点ドイツから清沢へ送付されたものに、「西洋第一の書」と書き付けられた可能性がある。
- ・吉田のように、「西洋第一の書」と書き付けたエピックテタスの書が存在するという証言と、住田のいう、沢柳が洋行後(明治三五年七月)に購入し清沢へ贈呈した

書があるという証言について、現在確認を取ることができない。

しかし推定できることは、明治三五年一二月発行「エピックテタス氏」の中の「他人の過失に対して怒るべからず」の抄訳内容が、『ティーチング』よりも、沢柳に返却したはずの『デイスコース』に近いことからすれば、もう一度『デイスコース』のような書を三五年七月以降に沢柳から贈られ、両書とも持っていたと考えることができるということである。「他人の過失に対して怒るべからず」という箇所両書の比較をみると、『デイスコース』第一巻第一八章「THAT WE OUGHT NOT TO BE ANGRY WITH THE ERRORS (FAULTS) OF OTHERS」(他人の過失に対して怒るべきではないということ)とあり、一方『ティーチング』該箇所は第二巻第一一章「HOW WE SHOULD BEAR OURSELVES TOWARDS EVIL MEN」(悪人に対して如何に振舞うべきか)とあるので、清沢の訳は『デイスコース』に近い。清沢が「エピックテタス氏」の中で翻訳した本文も同様に『デイスコース』に明確に近い。ここから沢柳が洋行後にエピックテタスの書を清沢に贈ったという住田の証言は、『デイスコース』を指しているのであろう。

付言すると、明治三五年の『当用日記抄』には清沢の抜き書きした英文が載っているが、それも『デイスコース』からの引用といえる。⁽¹⁹⁾ただ『当用日記抄』は原本がなく、月日が記されないので、沢柳に返却する前(三五年七月以前)の『デイスコース』からの引用であるかも知れない。

以上のように、住田や吉田の証言に従えば、清沢は『デイスコース』を一時期手放したが、沢柳から送られて、『ティーチング』とともに最後まで愛読した可能性が高い。

また両書を共に愛読した直接の根拠ではないが、清沢の一周忌の様子を伝える、多田鼎の文章には、東京の曙町浩浩洞の清沢のために用意された部屋に、『阿含経』や『歎異抄』と一緒に『エピックテタスの語録』『エピックテタスの教訓』、同訳書(清沢の死後出版された稲葉昌丸訳)を置いて法要を勤めたことを伝える。⁽²⁰⁾ここにある『語録』と『教訓』はそれぞれ、『デイスコース』と『ティーチング』のことであり、これらは清沢が普段読んでいたものと考えるのが自然である。

ただし『デイスコース』の、現物は「西方寺蔵書目録」にも確認できない。⁽²¹⁾最も確かなことは、『ティーチ

ング』が大谷大学図書館に現存すること、清沢の死後、『ティーチング』は清沢の手沢の書として扱われていくということである。このようなことから、清沢手沢本として唯一の『ティーチング』の研究がもつ意義は大きいといえよう。

大谷大学所蔵『ティーチング』の清沢直筆の書入れと安藤州一の視点

清沢に縁の深かった人物の中で、主に『ティーチング』を清沢の手沢の書として扱っていくのは、安藤州一という人物である。安藤は一九〇二年七月に東京東片町の浩浩洞へ入り、清沢に、「親しく薫陶を受け」るようになる八月から、清沢が真宗大学学監を辞職して大浜の自坊(西方寺)へ帰郷する一月までの約三か月間の短くも深い師弟の対話を伝える『清沢先生 信仰坐談』などの著作を残した。⁽²²⁾安藤は清沢の死後『精神界』紙上で、いくつかの清沢とエピックテタスに関連する文章を投稿している。安藤の言葉によって、大谷大学所蔵の『ティーチング』本文中の傍点やアンダーラインなどの書入れ箇所が、清沢本人によるものであることがわかり、さらにその書入れが清沢の死後意義深く扱われていくことがわ

かる。清沢と同時代を生きた安藤の言葉は、清沢本人の書入れであることを証明しており、重要な言葉である。

以下の安藤の言葉によれば、『ティーチング』は、清沢の死後、友人の稲葉が所有し、アンダーラインの箇所などを読み上げ、清沢の着眼点であるとして扱われ、親しまれた。

稲葉先生は、先師御存命中、親しく閲読せられたる、エピクテタスの遺書に就て、談話有之候。

其手沢の書に由て見れば、先師は、エピクテタスの意見中、如何なる辺に、尤も多くの趣味を有せられしかは、先師自ら其本に附せる、アンダーライン、即ち横線の有無に由て、之を窺ふを得可しとて、横線を附したる部分丈を読み上げられしが、其部分は、疾病の問題、衣食の問題、妻子の問題のみに有之候。尤も此三問題を解決するには、死の問題は常に附随するが故に、エピクテタスの所論に就て先師の尤も趣味を有せられしは、前の三問題と、死の問題との点に有之候様に見受けられ候。……貧困に由て死し、疾病に由て死し、海に由て死し、河に由て死するなどの事は、尤も世人の恐怖する所に候ふが、中に就

て、世人の最も震慄する所は、迫害に由り死刑に処せられるの一事に候。然るにエピクテタスは、死刑に關して、最も痛快なる解決を与へられ候。「爾、実を聞かんと欲せば、吾、爾に実を告げん。何如なる暴君なりとも、人の頭を刎ぬるに六ヶ月を費す者あらんや、されど、疾病は屢々人を殺すに一年を費す也、されば、吾人が幽冥界に赴くの方法中、暴君に由て施されたる死刑は、最も簡便喜ぶ可きの方法也」と言ふに至ては、宇宙己にエピクテタスを苦め得る者なきを覚へ候。稲葉先生が、右の一節を読み上げられし時は、小生は、エピクテタス、並に之を愛読せられたる先師の面目が、現に現前に躍動せるが如く覚え候。……曾て先師が、「予は憂悶に会する時、エピクテタスを読めば、心懷頓に清涼なるを覚ゆ」と仰せられし由、敏兄より承り及候が、今此稲葉先生の話されしアンダーラインの事とを綜合すれば、先師の常に現在安住を説かれし所以と、其憂悶を破るの秘鍵も、大略想像し得らる、事に候。⁽²³⁾

このように、清沢自ら『ティーチング』に引いたアンダーラインによつて、清沢が味わつた部分がわかるとい

う談話が残っている。これに基づいて、安藤が紹介した箇所を大谷大学所蔵の『ティーチング』から調べていくと、引用で網掛けをした「爾、実を……方法也」の箇所に該当する原文（『ティーチング』四八頁）には、以下のようにアンダーラインが引かれる。

But we perish by the sword, or the wheel, or the sea, or the tile of a roof, or a tyrant. What matters it by what road thou goest down into Hades? they are all equal. But if thou wilt hear the truth, the way the tyrant sends thee is the shortest. Never did any tyrant cut a man's throat in six months, but a fever will often be a year killing him. All these things are but noise, and a clatter of empty names.

この英文をみると、安藤の日本語訳は思い切った意識であるが、およそここに引用した英文への清沢のアンダーラインを指していることがわかる。清沢はこの箇所に一種の感銘を持っていたことが知られるのである。この文は「しかし我々は、剣や車輪や海や屋根の瓦やそし

て暴君によって死ぬ。あなたが死の世界へ落ちゆく道がどうかというのだ？ 皆同じさ。だがもしあなたが真実を聞こうとするのなら、暴君があなたを（死へと）運ぶ方法はもっとも短いものである。どんな暴君も六ヶ月もかけて人のど首をはねることは決してないが、熱病はしばしばあなたを殺すことに一年かかるだろう。すべてこれらのことは騒音に過ぎず、空しい名称の騒々しい響きである」という意味である。

晩年の清沢は自身の結核という病と向き合い、自身の死を感じつつ生きる中で、「死の問題」ということが大きな問題であったことは想像に難くないし、自らが病によって死を迎えるという感覚は迫りくるものとしてあったといえよう。この清沢のアンダーラインの箇所は、人の死に方はさまざまであるが、幸・不幸はなくそれらは名称の違いのみであって、死に方で人を差別することはできないことを説いた内容といえる。自身の死へのおそれや苦悩があるということ、誰であれ持っているものであるうが、もし自身の死への境遇を不幸であるなどの負の付加価値をつけて判断していくならば、人はその境遇へのさらなる歎きと苦悩を増幅していつてしまいうであらう。安藤によれば、エピクテタスの先の言葉は、死へ

の境遇と向き合う清沢にとって、「心懐頓に清涼なるを覚ゆ」る言葉として親しんだというのである。

また以下の安藤の言葉によれば、『ティーチング』に清沢が二重圏点や黒点をつけている箇所がいくつつかあることがわかる。

先生の御読みになつた『ティーチング、オブ、エピソード』を拝見すると、此辺の消息がよく分る。小生は先日來、稲葉先生から、清沢先生手沢の『エピソード』を借り得て、其一斑を窺ふて見たが、二重圏点や、横線を附してあるので、那辺に先生が趣味を有して御座られたか最もよく分ることである。一寸其例を示すと、「或人曰く、我れに錢なし、何処より麵包を得べきか」といふ所には、先生は二重の圏点を附し、其説明の所には、指頭大の黒点を附してある。また其説明が終つて、「路傍の乞食と雖も、尚ほ衣食するに非ずや、汝は何等の能力もなきか、門番も勤まらぬか、子守りも出来ぬか」と結んで、其次に、「然かし乍ら、そんな仕事は恥かしいではないか」と問端を起し、それに答へて、「然らば汝は、恥かしいと云ふ事は、どんなものであるか

を第一に学んで、然る後に哲学者と称せよ」と云ふ一段には、やはり指頭大の黒点を附してある。エピソードは、十分に急所を突いて、そこに手当の法を示してある。其手当がまた、包丁の牛を解くやうに、誠に爽快を極めて居る。是れが先生が西洋第一の書と称する所以である。⁽²⁵⁾

まず「或人曰く、我れに錢なし、何処より麵包を得べきか」の箇所に二重圏点があるという。実際に『ティーチング』の六四から六五頁を参照すると、「◎ But I have no money, saith one; whence shall I have bread to eat?」と安藤の指摘通りに二重圏点が記され、その下には「● 2. Art thou not ashamed to be more cowardly and spiritless than fugitive slaves are?.....」と黒点が記される。

「路傍の乞食と雖も、尚ほ衣食するに非ずや、汝は何等の能力もなきか、門番も勤まらぬか、子守りも出来ぬか」(How seldom is it that a beggar is seen that is not an old man, and even of exceeding age? but freezing by night and day, lying on the ground, and eating only what is barely necessary, they come near to being unable to die. Canst thou

not transcribe writings? canst thou not teach children? or be some man's door-keeper?」の辺りの安藤意識)があり、その次に、「然し乍ら、そんな仕事は恥かしいではないか」(But it is shameful to come to such a necessity!)とどう問への哲学者たる回答として、「然らば汝は、恥かしいと云ふ事は、どんなものであるかを第一に学んで、然る後に哲学者と称せよ」(Then first of all learn what things are shameful, and afterwards all tell us thou art a philosopher.)と述べ、この文章の処には指頭大の黒点があると安藤はいう。これについては安藤の指摘と、実際は若干ずれて、その一行下に「●3. Is that shameful to thee which is not thine ……」とある。

『ティーチング』の該当箇所では、清沢が黒点《●》をつけた意図としては、筆者の意見としては、黒点は1、2、3、といった小節の頭に付したものとされるが、いずれにせよ、この六四〜六五頁に清沢が重要な意義をみたという安藤の意見までは、否定するものではない。清沢は二重圏点《◎》を、『ティーチング』の「ある人がいうには、しかし私は金がない。どこからパンを得ようか」という内容の箇所が付している。そもそもこの問いはどのような文脈から発せられたのであろうか。

この章は、「我々は神の子としてどう考えるべきか」(BOOK II. CHAPTER VII. HOW WE SHOULD THINK AS GODS. OFFSPRING.)という章題のもとで展開している。ソクラテスのたえから始まり、信仰者の生き方を説いた章である。この章は、ある人が、ソクラテスに出身について聞いた時に、ソクラテスはアテネであるなどと答えずに、「宇宙」であると答えたというところから始まる。出身を尋ねられたときに、自分が産み落とされた一隅の名や家族の名をだすのではなく、その種族や自身の先祖が、我々に伝えてきた全土を包む、高貴なるところから自身が生じたのであり、神は自身の父であるのみでなく、祖父や子やまたこの地上に生れるすべての生きものの父であるという信仰を述べる。そして、それを学ぶ人は、必ず自身を「世界市民」であると名づけるべきであり、神の子であり、ゆえに人間同士に起こることにおそれる必要はない。皇帝や有力者と親類になることで人生をおそれなく暮らせるのか、そうではない。神を持つことこそが、深い悲しみやおそれから我々を解放するのではないかという。つまりエピックテラスにとつて神を信仰として持つということは、生れによって人を差別していくあり方をこえて、皇帝や権力者におもねる必要もな

いあり方であり、さらにその信仰が自身の憂いやおそれを解放するのだと考えたのである。

とそこで、ある人がエピクテタスにいう。「しかし私は金がない。どこからパンを得ようか」と、生活上の問題をあげるのである。この質問者はエピクテタスの言うようなソクラテスのな生き方への関心では、食などの生きる上での物質的関心に答えられないという不満があったといえよう。それに対してさらなる対話が続けられていく。エピクテタスは「あなたはずっと自らの死について安心して人に語ってきたのではないのか」という。すると質問者は、「だがわたしの大切な人がまた飢餓に苦しむことになるだろう」という。それに応じてエピクテタスはいふ。

それでどうなる？ 飢餓の人が君となにか異なるところへ導くというのか？ かれらが君の降りるところへ降りていかないのか？ かれらと君のためのあの世は一つではないのか？ それなら、君は、最も富める人や、最も権力のある統治者のところ、そう、王や暴君でさえも、降りていかねばならないところを見つけて、すべての貧困や困窮のなかにいて勇猛である

うとしないのか？ 君は、おそらく、飢えていて、われらは不消化で酩酊なほどに満腹ではち切れそうではあるが。⁽²⁶⁾

エピクテタスはいつも、自らの境遇が何であれ、死ということ、神のもとにかえるということにおいては皆同じであるならば、その生前の間の境遇に対しても、たとえ貧困や困窮であってもそこに勇猛なる生き方をすることを勧めた。対して質問者はいう。

「だがそのような〔飢えの〕窮境が到来することは恥ずべきことだ」と。

するとエピクテタスは、「ならば何よりもまず、何が恥ずべきことを学びたまえ、そしてその後で君は哲人であると我々に告げてくれたまえ。しかし現時点ではだれか別の人が君を哲人と呼んだとしてもそれに満足してはならない」と述べる。先の安藤の引用によれば、清沢がこの言葉を味わい、喜んだことがわかる。この文の主旨は境遇が恥だという質問者に対して、恥な境遇はなく、生き方が重要であり、恥とはソクラテスに習うような神の子としての人間の生き方から外れることなのであるということを暗示して説いているのである。つまりそれは

皇帝や権力者におもねるものでもなく、出身や地位を超えた世界市民としての生き方である。どのような境遇によつて死ぬのかは、人間の人生の価値としては、問題ではなく、エピクテタスにとつては、神の子として如何に生きるかが問題であり、そのことを抜きにして哲人と呼ぶことはできないという趣旨の章である。

なるほど、安藤が聞いていた清沢の言葉には、パンの問題の解決には死の問題の解決が不可欠であるということがあったというのは、やはりこのエピクテタスの一連の対話にあらわれている。

安藤が注目した着眼点は、「疾病の問題、衣食(パン)の問題、妻子の問題」という生活上の煩悶に対し、最も根本的な煩悶である「死の問題」の解決ということが、清沢の信仰上の人生をかけた課題であつたということである。

安藤が清沢からよく聞いたとして『精神界』紙上で言及するエピクテタスの言葉は、『ティーチング』の章立からいえば、先ほどから引用してゐる「CHAPTER VIII. HOW WE SHOULD THINK AS GOD'S OFFSPRING」の次章「CHAPTER IX. THE OPEN DOOR」も該当す⁽²⁾。安藤が清沢と対話した機会は、明治三五年であるか

ら、これが晩年の清沢の中心的な関心をあらわしていると考えられるのである。特に「死の」門戸は開いている(Door is open)という譬喩を安藤は晩年の清沢から聞いたのであり、清沢について論じる『精神界』の安藤論考にはその語が散見され、印象深く伝えている。以下、その「死の」門戸は開いている」という言葉に注目して考察してみたい。

死の門戸は開いている

清沢が最晩年までエピクテタスの思想に親しんだということは明白にいえることで、例えば、清沢は亡くなる五日前にもエピクテタスの談話を原廣宣にしていることが記録にある。文字通り自らの死のギリギリまで親しんだ思想である。興味本位なものではなく、結核を患つた清沢自身の生死を如何に受け止めるかという、自らの命をかけたものであつたといわねばならない。

Door is openという言葉が出てくるのは、「開かれた戸」(BOOK II CHAPTER IX. THE OPEN DOOR)とどう章である。前章の「我々は神の子とてどう考えるべきか」(BOOK II CHAPTER VIII. HOW WE SHOULD THINK AS GOD'S OFFSPRING)では、「我々は神の子であるとい

うところから、他者とも平等であり、臆病になったり自分を卑下したり、他人におもねる必要のない生活をエピクテタスは説いたことがわかるが、一方その次の「開かれた戸」という章では、自分の生活の苦しみや束縛から、神のもとへと旅立つ、すなわち死を選ぼうとする人々の意見に対してエピクテタスが如何に語ったのかがまとめられる。

エピクテタスよ、我々はこの身を束縛するものや、飲食を与え、休み、清潔にし、そして相次ぎある男に追従するために歩き回ることに、もはや耐えることができない。そのようなことは我々にとつて無関係であり何でもないことではないでしょうか？死は悪ではないのではないのでしょうか？我々は何かしら神と親類であるのではないのでしょうか、そして我々は神からやってきたのではないのでしょうか？我々が来たところへ出発しよう。我々が縛られ重荷とするこれらの束縛からついにのがれよう。この肉体や所有物に対して、まるで我々を超えたある権力を持つたように、ここには盗賊や、盗人や、法廷や、暴君と呼ばれるものがある。彼等がどんな人間を超えた

権力も有しないことを見せてやろう。⁽²⁹⁾

と、この世の苦や束縛から逃れるために命を絶ち、神の世界に帰るといつて、自らの死を選ぼうとする人々の言葉が出る。対して、エピクテタスは以下のように、死もこの生を与えられ、神によって自身がここに置かれたことも、神の意志として置かれたという尊さがあり、自らの意志や、それぞれの機会の言い訳のためには、自殺などの行動をしてはならないと説く。すなわち、

友よ。神を待て。神が自ら合図を与えて、あなたたちをこの奉仕から解放するとき、あなたたちが神の方へ解放されるのです。しかし今は、神があなたたちを配置しなされたこの場所に住まうことに耐えるのです。あなたたちの滞在の時は、実に短いし、そのように心がけられたものには、耐えることは容易いのです。肉体やその所有物を何でもないとする人にとつて、暴君や盗人が望むものが何だ、法廷の何が恐ろしいか？ここに残りたまえ、そして、正当な理由がなければ〔神のところへ〕出発しないでください。⁽³⁰⁾たまえ。

という。そして、

議場が煙っているか？もしそれがひどくなければここにどまるだろうし、もしひどいなら出て行くだろう。というのは、これは常に覚えておくがいいし、しっかりと把握しておくといいことだが、それは扉は開かれている (Door is open) ということである。

「君はニコポリスに住んではならない」というなら、私は住もうと思わない。「アテネもだめだ」というなら、私はアテネも住もうと思わないし、「ローマもだめ」というなら、ローマも住もうと思わない。

「流刑人の島ギヤラに住め」というならば、そこに住もう。だがギヤラに住むことは、すごい煙のようにみえる。私はだれも私の住むことを妨げようとしなるところへ出発しよう。——というのは、この居場所は常にすべての人に開かれているからである。

ただしこれをなすには不合理であってはならない。卑怯であつてもならない。あらゆる共通の機会を言い訳にしてもならない。それは神の意志ではない。というのは、神は地上においてこのような秩序や、種族を必要とするからである。しかし神がソクラテ

スになしたように、もし神が退却の合図を与えるなら、我々は我々の指導者たる神に従わなければならない。⁽³¹⁾

エビクテタスによれば、死への扉は常にすべての人に開かれている。だがそこへ旅立つことは本当の意味で神の退却の合図でなければならぬ。以上のような議論を清沢は結核に苦しみ死と隣り合せの中、自身の身上とも重ねて読み込んでいくはずであり、死のあり方がいかなるものであるべきか厳格に求めたと思われる。

この「扉は開かれている」という内容に関連して注目したいのは、清沢が『ティーチング』を購入する数か月前の浩浩洞書簡には、トルストイ（一八二八～一九一〇）を読んで、エビクテタスの Door is open と通じるものを感じている箇所があることである。

「前略」。Tolstai 伯の『我が懺悔譚』を讀過いたし候。此に合綴の『基督教訓の精神』の中に、

Though I cannot create bread out of stone, yet I can refrain from bread, and so, if not almighty in the flesh, I can become so in the spirit, for I can

conquer the flesh, and not in it, but in the spirit, be the Son of God.

と、有之候。此は固より福音を意識したものとあれば、普通新約書には、何となり居候や不存候得共、Epictetus 氏の「Door is open」と同意義と存候。「食へないときには死ぬ」といふが、人生の終極命題とは、頗る簡短なることに候。此の如き簡単な人生を摺つた揉むだと、大乱癡戯をさする精神は、不思議なるものと感じ居り候。

浩々洞諸兄³²

英文は「石からパンを作ることではできないけれども、それでも、パンを断つことはできるのである。それゆえに、かりに肉体として全能とならなくとも、わたしは精神の内にそうなることができる。わたしは肉体を征服することができるが、肉体ではなく、精神内において、神の子であることができるのだから」というほどの意味であり、それがエピクテタスの言葉と通じるといふ。

《死》というものが、「食べないとき（パンを断つとき）は死ぬ」という極めて簡単な命題におさまるものがあるけれども、実際の精神はそれに決着がつかず「大乱

癡戯」をなすものであるという点に清沢は注目している。清沢にとつて Door is open という簡明な命題は、一方で人生の生活上の苦を軽減し、また一方で自ら生じる妄念を内省するとき、「食べないときには死ぬ」というその一言に決着することのできぬ身であるという実感を生じたものと思われる。この書簡の後に購入し読んだ『テイチング』には、「◎ But I have no money, with one; whence shall I have bread to eat?」と、『◎』が書入れているということは、この問題を繰り返し推求した証拠である。

では安藤は清沢の言葉や姿勢をいかに受け止めたのだろうか。安藤の言葉を手がかりに、Door is open の言葉についての理解を見てみよう。

安藤によれば、清沢はエピクテタスの言葉によつて、「死の問題」に向かい自ら慰められたという。「死の問題」が清沢を襲うとき、「Door is open」と、死の門戸は常に開て居る。死なんと思へは何時でも死ぬることが出来る、何も自ら死をいそぐ必要はない³³と、またその清沢の生き方は安藤にとつては、「先生の身より妻子を奪ひ、衣服を奪ひ、最後にパンの凡てを奪ひ去るとも、先生は毫も動せざるなり。偏へに如來の大命を感謝し

Doors is open の語を低唱して、静かに死の運命を待つべき人なり、是れ、余が先生に就て知り得たるの一事なり⁽³⁴⁾というように安藤には映ったのである。安藤にとつては、清沢という師が様々な苦難の境遇の中にありながら、慌てふためくのではなく、そこから逃れようと死を急ぐのでもないような態度に映り、それは生きる上での無言の教示であったのであろう。安藤は、Door is open、そして自らの死は神の命にあるということとを、「如来の天命」として真宗の伝統の中で受け取り直し、清沢の生き方を仰いだ。おそらく、清沢も God を「如来」と言い換えて自らの信仰の伝統の中で、エピクテタスの思想を受け取り直していることにもよるのであろう。安藤は、清沢が Door is open という語を小さな声で唱えていた（低唱）というが、その語は、「人生凡ての煩悶に就て、最後の解決をなせるもの⁽³⁵⁾」としての覚悟を意味していたのである。しかしこのような覚悟は、次の引用によれば、常態的に生活上の妄念・怒りの情念が起きないという意味ではなく、そのような心が起こった時に立ち返ることができるところという意味であり、それは『歎異抄』の立場とも通じると安藤は以下のように受け取っている。

自己の覚悟は自己の覚悟、天命の指配は天命の指配で、自己の覚悟は、如何なる時にも、如何なる処にても、常に確然不動で、予は何時にも死ぬる事が出来るとの覚悟である。其覚悟ある上は、天命の指配はエピクテタスの関知する所ではない、長命にしようふと、短命にしようふと、富貴にしようふと、貧賤にしようふと、凡て天命の指配のまゝである。自己の覚悟さへ確立して居れば、無条件に天命の指配に依頼することが出来る。「死の門戸は常に開いて居る」といふ自覚をしたエピクテタスでなければ、「予は如何なる事か起てもそれに満足する、何となれば、予の選択よりも、天命の選択は喜良なるが故に」との、絶対的天命依頼の信仰は起らるのである。

親鸞聖人が、「いづれの行も及び難き身なれば、地獄は一定すみ家ぞかし」と言はれたのも、やはり、自己の運命を確然不動の地位に定めたもので、此覚悟は、欲か起つても、腹が立てても、妄念が起ても、罪悪に沈んでも、如何なる時にも、確然として動かざる覚悟である⁽³⁶⁾。

安藤の言葉は、清沢は死の問題を解決したことで人生

の様々な生活上の問題に対して、不動の動じない精神をもって対処することができたように読み取ることも可能であろう。しかし一つ気を付けて読むべきは、この「不動」という意味は精神的達観によって、常に自らの生じる精神作用に波風がないという意味とは違う。なぜなら、『歎異抄』の「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という精神について、安藤が「此覚悟は、欲か起つても、腹が立てても、妄念が起つても、罪惡に沈んでも、如何なる時にても、確然として動かざる覚悟である」と述べるように、実際には様々な妄念や心の波風が立つことをいっているのである。ここでの「不動」というのは、どのような心身の波風の時にても、「死の門戸は開いている」という事実に関しては、不動なることであり、様々な心情の起こるときに、その事実を思い直すことができる覚悟であるという意味での不動ということだ。清沢においての Door is open というのは、自らの妄念と対峙するときに、その言葉に導かれ、唱えつつ、自らを確かめなおすものであった。

清沢にとっては、エピックテタスや『歎異抄』の精神に親しむことで、生活上の煩悶への効果があった。「死の門戸は開いている」という境地には、「大乱疑戯」をな

して常態的には定住することができないという清沢が、だからこそ、一過性のものでなく継続的にエピックテタスの言葉を低唱し、『歎異抄』の心に立ち返り、人間らしく自身の苦悩と向き合い続けていく正直な姿を安藤は魅力として感じたのではないだろうか。

「奴隸について」という章のアンダーライン

最後に清沢の研究史において重要といえる「奴隸について」(BOOK III CHAPTER IV. ON SLAVERY) という章の書き入れについて取り上げてみたい。以前筆者は、清沢の取り上げる「奴隸」という言葉に注目して考察したことがある³⁷。ここでは従来清沢批判で述べられてきた梶鳥敏の「服従論」という論考に説かれた、外物や他人に対して男らしく奴隸的に服従する態度を推奨するという立場と、清沢の立場の関連性について、筆者は反対意見として「奴隸」という用語に関して清沢と梶鳥では特に異なっており、相反していることを主張した。この考えについて変わっていないが、『ティーチング』の書入れに注目することはできなかった。そこでこの主張の補強としても、『ティーチング』の「奴隸について」という章の以下の箇所にアンダーラインが付されていることを

述へておきた。

2. That which thou wouldst not suffer thyself seek not to lay upon others. Thou wouldst not be a slave – look to it, that others be not slaves to thee.
For if thou endure to have slaves, it seems that thou thyself art first of all a slave. For virtue hath no communion with vice nor freedom with slavery.
3. As one who is in health would not choose to be served by the sick, nor that those dwelling with him should be sick, so neither would one that is free bear to be served by slaves, or that those living with him should be slaves.⁽³⁸⁾

「君が自身で経験したくないことについて、他人に課そうとしてはならないよ。君は奴隷になりたくないだろう。他人が君の奴隷とならないように注意したまえ。というのにはかりに君が奴隷を所有することを許容するならば、君が何よりもまず奴隷であるように見えるからだ。というのには徳は悪とは交渉なく、自由は奴隷であることと交渉を持たないからだ。健康な人が病人に奉仕されること

を欲しないように、また同居人が病気になるべきなどと欲しないように、自由な人は奴隷に奉仕されることに我慢ならないし、一緒に生活する人が奴隷であるべきとも欲しないのだ」という文である。

この箇所について、Rollston の訳注をもとに、佐久間政一は、「人間の尊厳といふ事に関する意識は、エピクテータスに於て、甚だ強かったのは、この章によつて解る。ストア派のいかなる学者も、奴隷制度を非難した事はなかったと云ふ説は、間違である。但し異教の思想家として、これを非難したのは、思ふに彼一人位のものであらう。エピクテータスは自身奴隷であつたので、この境涯に於ける生活が、いかなるものであるかを、泌々と体験したのであるから、彼のこの言には、無限の味がなければならぬ⁽³⁹⁾」と述べる。

この言葉は傾聴すべきであろう。ややもすれば、清沢自身の信仰上の振る舞いや倫理観は、「奴隷のように従うこと」を是としてしまっていると解釈されることもあるが、清沢は、自分が奴隷になりたくないように、他者は奴隷になりたくないのだから、他者を自分の奴隷にしてはならないのだという意味合いの箇所に、アンダーラインを引いていることに注目したい。清沢の晩年に「如

来の奴隷となれ、其他のもの、奴隷となること勿れ⁽⁴⁰⁾という言葉が日記に記されているが、それとも関連している重要な書入れ箇所であるといえる。如來の大明に従うことと、他人や金銭などの諸欲への奴隷とならないことを清沢が重視したのは、ここから読み取れるだろう。加えて、他人などに男らしく奴隷的に服従する態度を推奨する暁烏の論考が生まれたのは、当時の暁烏がエピクテタスを卒読し誤解した可能性も視野に入れて再検討すべき問題である。

おわりに

本稿では、清沢の手沢本として現存している『ティーンング』の書入れが清沢の死後に注目されたことを指摘し、特に安藤によって回想される「死の問題」ということに注目して考察した。清沢手沢の『ティーンング』が、清沢に如何に読まれ、如何に受け止められたのかについて、安藤の視点を主に取り上げた。

そこで、清沢は死の境遇などによって人生の価値づけをしないあり方に注目していたことがわかった。明治期の仏教者には、境遇や死に方の違いの理由を前世の業因縁に求める言説が依然として多く存在したのであるが、

清沢がエピクテタスの死の境遇に人生の価値を置こうとしない態度に注目する意義を明治という時代状況を通してみるならば、差別という問題を超えるための思想的立場を模索した思索の痕跡であるともいえるのではないだろうか。

清沢の死後、エピクテタスの思想をどのように読んだのが注目され、そのことを考えていく為に、書入れが注目されていたのであるが、そのなかでも主に安藤の導きによって、「死の問題」「パンの問題」「Down & open」という安藤が清沢の思想として注目した文章を考察していった。安藤の解釈がそのまま清沢の思想であるとは、結論づけることはできないが、安藤の見方は研究の一視点として重要である。安藤の目に映った清沢は、人生のさまざまな苦悩、苦難の精神上的の解決には、死の問題の解決がなければならないと考え、それを実践した人であった。

また「奴隷について」という章の書入れに注目して考察を行なった。清沢思想の解釈史として『奴隷』という概念は注目に値する。今回「奴隷について」という章の「自分が奴隷になりたくないように、他者は奴隷になりたくないのだから、他者を自分の奴隷にしてはならな

いのだ」という意味内容の文に、清沢自らアンダーラインを引いていることを指摘した。これは従来の清沢批判で取り上げられる暁鳥敏「服従論」と清沢との関連性に関する議論の中でも、注目すべき文章であり、また清沢の晩年の思想営為を考察するにあたり、極めて重要であるといえよう。

清沢と安藤の対話の痕跡は、エピクテタスやトルストイなどの西洋思想・文学の影響を受けながら、『歎異抄』をはじめとする親鸞思想について、自らの主体的救いに直結する語り方が為されていく近代特有の現象の先駆的事例の一つといえるだろう。

今回の考察では、いまだ清沢の晩年とエピクテタスの関係を詳細に読み解くまでは至っていないし、今回扱った章は『ティーチング』に清沢が書入れをした一部分に過ぎない。興味深い清沢の書入れはまだまだ存在するが、字数の制約もあるので今後の課題としていきたい。

付記

本稿を執筆するにあたり、大谷大学図書館所蔵の『The Teaching of Epictetus (『ティーチング』)』の複写・引用許可をいただきましたこと、同大学真宗総合研究所清沢満之研究室所蔵の資料「西方寺蔵書目録」を閲覧させていただきました

たことを付記して、謝意に代えさせていただきます。

註

(1) 現代は「エピクテトス」と表記することが多いが、本論で引用する明治期文献が英訳の発音に近い「エピクテタス」という表記を使用しているので、それに統一することにする。

(2) 例えば、名和達宣「清沢満之を「一貫する」思想―『臘扇記』を手がかりとして」(『現代と親鸞』二八、二〇一四)。同「『臘扇記』を読む―清沢満之における転換期」(『現代と親鸞』三三、二〇一六)。角田佑一「清沢満之『臘扇記』における「意念」の内的構造」(『宗教研究』九三―一、二〇一九)など。

(3) *The Teaching of Epictetus: Being the "Encheiridion of Epictetus," with Selections from the "Dissertations" and "Fragments," translated from the Greek, with introduction and notes, by T. W. Rolleston* (London: Walter Scott, 18-).

(4) *Discourses of Epictetus: With Encheiridion and Fragments and Life of Epictetus and A View of His Philosophy.* trans. George Long (London: George Bell and sons).

※出版年は比定であり研究者によって異なる。

(5) 安富信哉「清沢満之と個の思想」(法藏館、一九九九)、一四二頁。西本祐攝「近代親鸞教学における現生正定聚論―清沢満之における現在安住の背景と内実―」(博士

- 論文 大谷大学、二〇〇七)、資料編。
- (6) 名和達宣は、両書を「併せ持つて」いたと、この見解を示す(名和「二〇一四」、註11番)。暁鳥敏が「この書を併せ味はれた」(法藏館版『清沢満之全集』八、一八三頁)と述べていることなどがおそらく根拠であると考えられる。
- (7) 西本「二〇〇七」。
- (8) *Epiktets Handbuechlein der Morali: nebst anderen Bruchstueken der Philosophie Epiktets, aus dem Griechischen ubersetzt von H. Stuch (Leipzig: Philipp Reclam jun., 1884)*。出版年は、仮に初版年とした。
- (9) 『清沢満之全集』(岩波書店 以下、『全集』)九、五〇頁。
- (10) 『全集』六、三二二頁。
- (11) 西本「二〇〇七」。
- (12) 『Introduction』『ティーチング』xiii～xv頁。
- (13) 『Introduction』『ティーチング』xiii頁。
- (14) 『人生談義』下、岩波書店、三〇九頁。
- (15) 『全集』六、三二二頁。
- (16) 『資料清沢満之資料篇』二七二～二七二頁。
- (17) 成城学園沢柳政太郎全集刊行会『沢柳政太郎全集』一〇、(国土社、一九八〇)、五二二頁。
- (18) 『資料清沢満之資料篇』二八六頁。
- (19) 当用日記の部分と、その『ディスコース』と『ティーチング』の該当箇所の比較のためにあげておく。「明治三十五年当用日記抄」①「However it may be, you will dispose of it well, and the result to you will be a fortunate one.」②「Have I ever blamed thee? Have I been discontented with any-thing that happens, or wished it to be otherwise.」と清沢は引用しており、『ディスコース』の①三六一頁と②三六二頁に該当する。『ティーチング』九〇頁、九二頁に、同じ意図の文はあるが、英文が異なっている。日記に『ディスコース』を引用しているので、明治三五年時に明らかに『ディスコース』を持っていた時期があるが、沢柳に返却する前の『ディスコース』であった可能性もある。
- (20) 多田鼎「先生一周忌の記」(『精神界』四一六、一九〇四年六月)、三七～三八頁。
- (21) 「西方寺蔵書目録」(大谷大学真宗総合研究所清沢満之研究所蔵) 参照。
- (22) この安藤と清沢の出会いについて、名和達宣「清沢満之とその門下との「対話」—安藤州一「清沢先生 信仰坐談」を読み解く—」(『現代と親鸞』三三、二〇一六)を参照。
- (23) 安藤州一「清沢先生とエビクテタス氏」(『精神界』六一七、一九〇六年七月)、三七～三八頁。
- (24) 『ティーチング』四八頁。ここでのアンダーラインは清沢自身が記したアンダーラインをあらわし、網かけは安藤が意識した箇所に該当する部分をあらわす。
- (25) 「清沢先生追懐録」(『精神界』一〇一七、一九一〇年七月)、四七頁。「資料清沢満之資料篇」二九五～二九六頁。

引用中の網掛けは、『ティーチング』六四～六五頁の安藤の意訳である。また「追懐坐談」（『精神界』一一一六、一九一一年六月）、四三頁）にも清沢の書入れに注目する文がある。

四～一六五頁。
(40) 「明治三十六年当用日記抄」（『全集』八）、四五四頁。

- (26) 『ティーチング』六五頁。
- (27) 「THE OPEN DOOR」の次章「CHAPTER X. KNOW THYSELF」にも、アンダーラインが引かれる。
- (28) 原廣宣「清沢先生終焉記」（『精神界』四一六、一九〇四年六月）、二四頁。
- (29) 『ティーチング』七一頁。
- (30) 『ティーチング』七一頁。
- (31) 『ティーチング』七二頁。
- (32) 『全集』九、二七六～二七七頁。英文は、Tolstoy, *My Confession, and the Spirit of Christ's Teaching* (London: Walter Scott, 1889), p. 176. などが比定される。
- (33) 安藤州一「東片町時代の先生」（『精神界』四一、一九〇四年一月）、三九頁。（『清沢先生 信仰坐談』）。
- (34) 前掲、四〇頁。
- (35) 安藤州一「清沢先生の余影」（『精神界』四一四、一九〇四年四月）、四七頁。
- (36) 安藤州一「確然不動の覚悟」（『精神界』五一、一九〇五年一月）、三二頁。
- (37) 拙稿『清沢満之における「他者」—その思想と問題を巡る考察—』（博士論文 大谷大学、二〇一六）。
- (38) 『ティーチング』、一一〇頁。
- (39) 佐久間政一訳『人生語録』（文修堂、一九四九）、一六